

■コメント

野山 ありがとうございます。続いて、今までの話を踏まえた上で、2人のコメンテーターから話をいただきたいと思っています。1人目は、学習心理学の立場から、高木光太郎さん、続いて日本語教育学の立場から、石井恵理子さんからお願いします。

◆ 参加することが学習になる

高木光太郎 僕に与えられた課題というのは、このプロジェクト自体が、「共生のまちづくりに向けたプログラムづくり」ということで、今日のいろいろなお話から、そこにつながっていくような何かを、私の専門の方からいくつか見つけ出してお話をすることだと思っています。今まで出てきたお話の言い換えみたいになってしまうところがありますが、気がついたことをお話しいたします。



高木光太郎

「共生のまちづくりに向けたプログラム」ということで考えると、基本的な発想の部分で、ものすごく重要なことがあるなと思います。日本語学習で、学習言語と生活言語という言葉を使いますが、生活言語という言い方は、今日お話をうかがっていて、根っこから考え直してもいいのかなという感じがします。つまり、今日の一連のお話をものすごく大雑把に言ってしまうと、ある地域の中で生活者としてその人が生きていくためには、どういうことが支援できるのか。言葉も含めて、どういったことがサポートできるのかというお話だったと思いますが、そういった視点で、その地域の生活者として参加していく回路をどうやって開いていくのか。そのときに、基地みたいなものとして日本語教室があって、表向きというか、一番大きなプログラムとしては日本語というものを使うわけですが、その日本語に付随しながら、地域にとにかく根付いていく、僕たち心理学の世界では、最近、「参加論的な学習論」という言い方がはやっていますが、とにかく地域にその正統なメンバーとして参加してもらう。そのために何ができるのかということを懸命にしていると思いました。これは、異文化交流とか、異文化理解みたいな発想とはかなり違うところがあって、2つの文化をどうやって融合するかみたいな、ある意味では大所高所の話ではなくて、ここにいる人の生活をどうやってつくっていく

のか、この人は今までこの地域で生活していたわけではないし、言葉もできないし、どういう形でそこに参加していったらいいのか。ただし、そこで完全に埋没されても困るので、どうしてゆこうかなという話になると思います。

今日のお話の中で何度も強調されていたことだと思いますが、やはり生活の上での必要性ということが第一に挙げられます。例えば、先ほどお話のあった書き言葉とか、読み書きの方から力を入れていくという。これは言ってみれば、この地域で生活したり、生きていくときに何が大事と考えたとき、真っ先にその話が頭に浮かんでくる。前に北川さんにお話をうかがったときに、例えば敬語を早めに教えるという話をされていましたが、それなども含めて、ひとつは生活に参加していくというのは必要性の問題だと思います。必要性ということをもっと強調されているのだと思います。

もうひとつは何かというと、地域というのは、地域ごとのルールというか仕来りがあるわけで、その仕来りの中で生きていけるようにするということがあるわけです。必要に応じて、仕来りに従って生きるのって、いかにも息苦しいわけですね。でも、北川さんがお話の中でもうひとつ強調されていたのは、その地域の中で自分なりの役割を果たすということだったと思います。それは当然、違う国からやってきて、別の背景を持ちながら今まで生きてきたわけですから、その地域でずっと暮らしてきた人たちとは違う形で、そこで何か役割性が担えるのではないかと。地域の中で、その地域で生きていくための必要性に応じて、しかもその地域の中で、地域の慣習だとかルールだとか、地域の人たちのものの見方というものに十分対応できる形で、そこに参加しつつも、個性的になっていくというか、自分なりのやり方をつくっていくようなことを言われていたのかと思います。

そのような形で、参加していくということ全体が、能代市の日本語教室の学習であって、例えば書き言葉を身につけるとか、何かについてルールを知るといったのは、言ってみればその手立てみたいなもので、トータルでここで起こっている学習って何だろうと考えると、参加すること、それ自体がひとつの学習になっているというのが、僕が思ったところです。これが一点目になります。

もうひとつは何かというと、特に北川さんのお話をうかがっていていつも感じるのですが、いわゆる闘うということですが、例えばお役所とどうやって付き合っていくか、教室を存続させ、その中で学びをつくっていくために必要な手練手管といいますか、そういったものは非常に重要になってくる。これは実践論として重要なのだと思いますが、一方で、キーパーソンになるような人の資質の問題であったり、教室をどう形作ってゆくかというような、行政との距離感をどう

保って運営していくのかということを考える上では、重要な問題ではないかと思いました。

◆ 受け入れる側の変容にも注目

さらに、今日のお話で、今の2つの話を踏まえてということになりますが、面白かったというか印象的なのは、藤田さんがお話しになった消防士さんのお話です。生活の必要性というのは、外国人で日本語のことを学んでいる人たちだけの必要性ではなくて、地域の人にとっての必要性とか、そこで働いている人にとっての必要性ということがあるわけです。消防士さんで救急をやっている人にとっては、言葉が通じないということはまさに1分1秒を争う生死の問題に直結するわけです。だから、すごく意味がある営みとして言葉を学んだりしている。それがシステムとして本当に効果が上がるほどのシステムになったのかどうかというのは、また検証しなければいけないと思いますが、モチベーションとしてそういったことが掘り起こせたというのは、具体的な生活というか、その地域で活動するときの必要性みたいなところからきている感じがするわけです。

そういったことというのは、単に元からある地域が中に新しい人が入って来たので、その新しい人の側が、自分がいろいろ生活が大変だから、それに向かって頑張るというだけではなくて、新しい人を迎え入れると、必然的に今までいた人たちの側というのも何らかの新しい取り組みをしなくてははいけないんですね。新しい取り組みで、好ましくないのは、例えば無視をすとか、見ない、なかったことにするということから始まって、何らかの対処があるわけです。そういう中で、消防士さんだとか、人の命とか健康に直接かかわるようなことは一番切実だと思いますし、何とかしてあげたいという気持ちを持つ人が非常に多いと思うので、そういうところから始まって、もともといた側の必要性というところまで掘り起こすということが重要なのではないかと思いました。

例えば消防士さんの防災の弁論などを聞くと、研究テーマとして、これで多文化に対する意識はどう変わりましたかという問いを立てがちだと思いますが、率直に言うと、あまりそれは面白くないと思います。意識が変わると考えるなら、やはり必然性として、そういったことをやってもいいかなと思えるような機会がくれたということだと思います。むしろその機会がどういうものであったとしても、それが切実なニーズとして、その地域の中で掘り起こされたということが重要であって、そうすれば当然やる気が出るわけです。本人の異文化理解の意識が変わったからどうのという話ではない。そういう話ではなくて、実生活レベル

で、何かに出会って変化が起こったというふうに考えた方が面白いかなと思えました。そういう意味で、やはり必要性だったり、こういうふうにはやらなければ、ここではいろいろ反発を食ったりするんだよね、というようなルールの問題だったりということが重要な視点になってくると思ったわけです。

野山 ありがとうございます。それでは日本語教育学の観点から、石井さんお願いします。

石井恵理子 お話をうかがいながら、改めて何のための日本語教育なのかということを考えてながら聞きました。何のための日本語教育、あるいは何のための日本語なのかというと、それはやはり、社会的な存在である人が、人としてより人らしく生きていくために、周りの人たちと交渉し、調整をしていくにはどうしても言葉が必要だということに行き着くのだと思います。そこを基盤にずっと考えていくということなのだ、と思いながら今日のお話をうかがっていました。

◆ 日々の微妙な変化の相互作用

聞いていて確認できたことは、交渉というのは一方的に理解するとか、一方的に何かものを言うということではなくて、相互行為だということです。留学生に対する教育や日本語学校など、今までの従来型の日本語教育の場というのは、どちらかというとノンネイティブだけを集めて、その閉ざされた空間で、例えば日本人というのはこういうふうにものを考える、日本人というのはこういうふうな言い方をする、日本の社会はこうなっている、ということを理解するという教育になりがちな部分があって、もちろんそれを一生懸命変えようという努力をずっとしてきているわけですが、そのことへの取り組みを今日はお話としてうかがったと感じています。

相互交渉が起これば、当然そこで調整がなされていくわけですが、そのことは取りも直さず、両方が変わっていくということなのだろうと思います。最近読んだ本で、分子生物学の領域の専門家の方が書かれた『生物と無生物のあいだ』（福岡伸一著、講談社）というとても面白い本の中で、生物の強さであり、無生物と分かれる非常に大きな特徴というのは、生物というのは常に変化していることだということです。つまり、私たちの体をつくっている細胞、例えば今日の私と明日の私とは、パッと見たところで何も変わっていないように見えているけれども、実はすべての細胞が本当に短期間で



石井恵理子

ゴツソリ入れ替わるということを繰り返している。そういう繰り返し、全部新しくなっていくということの中で、安定的な平衡が保たれていく。

例えば石はちょっと欠けてしまったら、その欠けた部分はもう何によっても補われないわけです。ところが、生物というのはそうやって常に細胞が新しく変わっていくことをやっているために、どこかにちょっと不都合が起こっても、全体が変わっていく中で、別な部分が補うという働きによってまた元の健康を取り戻すということも可能なのです。逆に言うと、そういう全部が入れ替わっていくという動的なシステムが止まった瞬間に、それは死ぬということなのだという。私のまとめ方が正確かどうか、怪しい部分もありますが、趣旨としてはそういうことだと私自身は理解しまして、まさに今の日本の社会が抱えている、地域の再構成といいますか、まちづくりという問題もそういうことなのではないかと思うのです。さまざまなバックグラウンドを持った人たちがその地域の構成員として入ってくるというときに、すべての構成員が大きくではなく、微妙な、毎日毎日の小さい交渉や調整の中で、うまくそれぞれを変化させていくという、動的なシステムをどうつくっていくか。

今日のお話の中で大事だと思った部分は、北川さんもお話しになっていましたが、日本語を使うことで初めて自分たちもものが言える。それがまず、最初の動的なアクションだと思います。ただ、ものを言っておしまいではなく、そのアクションによってそれを知った日本人の側から別のアクションが起こるというサイクル、あるいは連鎖というか、連動というか、1カ所の閉じた日本語の教室という空間の中で何かをやっているのではなくて、社会全体の関係の中で、そこで学んだ言葉というのが次々に、玉突きのように次の活動を生んでいくということが見えたというふうに思います。

消防士さんの例や中国語の講座とか、そういったこともみんなそういうことなのだろうと思います。どちらかというと、日本語教育では、地域の日本語教育もそうですけれど、外国人の側のニーズということに私たちは注目してきました。外国人が日本の社会で暮らすためには、こういうことが必要だ、こういうことがないと困るだろうという、外国人のニーズにばかり注目して考えてきた。そのことは、だから日本語教育は外国人のためにあるという意識につながってしまうわけですけれども、当然のことながら、外国人にニーズがあるのと同時に、その人たちと一緒に社会で生きている日本人の側にもニーズがある。あるいは、さまざまな人を抱え込んだ社会としてのニーズがある。そのニーズがピッタリかみ合うという場合もあれば、必ずしもそうではなくて、そこがぶつかるということもあ

る。その中で、大衝突ではなく、日々の小さいお互いの動きによって調整していくという機能が、行政が政策的に行うシステムづくりの前に、日本語を学ぶ、そして日本語を使うということを実践している日本語教室と地域社会の一人一人の人々との関係の中でどうできていくのか。地域の日本語教育のひとつの非常に大きな役割として、地域の中にそういったサイクルと申しますか、連動する動きというのをどうつくるのかということがあることを、改めて感じました。

◆ 生きていくための学習言語

そういうことを考えるときに、今生きているこの社会の中の地域全体でそれがどういうふうに見えてくるかということを考え、それをどうするかということがひとつ。それは今日、いろいろな事例としてうかがえたと思います。地域ばかりでなく、今日の事例にあったような外国人配偶者として入ってくるというような家庭の場合は、もしかすると家庭の中に純粋な日本というものを保とうとするような動きが強いケースもあるかと思えます。家庭の中、あるいは地域の中、学校などもそうですが、その中でどううまく動きをつくっていくか。そして家庭と地域がまたそれぞれつながって動いていくでしょうし、地域と学校、地域と家庭との間に動きをつくるためには、言葉が重要な役割を持つと思えます。消防士さんの例などでも、例えば処置をするだけだったら、病院に担ぎ込んで、そこで終わったわけです。火傷を何とかするというところは、それで解決ができた。けれども、そこでやはり、そのときは通訳を介してでしようけれども、なぜ治療を拒否したのかということが明らかになり、運び込む病院がないという事態でも何とかなるということに結びつけるためには、言葉がなければどうしようもない。

もう一度初めに言ったことに戻ると、「すべての人が人としてより人らしく生きていくということを実現させるための言葉」ということを考えたときに、今、取りあえず私たちは日本語、日本語教育のことを考えていますけれど、それは中国語とか、英語とかほかの言語を我々が理解していくべきというふうに変わることもあるということも含めて、そういう言葉の教育として日本語というものを取り上げたいという気持ちです。

もうひとつ、今生きている同じ時間軸にいる社会の中でのということと同時に、今度は時間の流れの軸において、そういう動きをどうつくっていくかということを考える必要があると思えます。特に子どもの例というのは、その視点がなければうまく育てられない。子どもというのは、今の、日々の暮らしというところでは、例えばお友達がいて、好きなテレビがあって、好きな本があって、好きな漫

画があつてというような中では、取りあえず大きな問題は見えないかもしれません。ただ、それを将来につながる時間軸で考えてみたときに、この子の将来というものをどう開いていくかということには、もうひとつ別の言葉の役割がある。それは、ただ「今のこの時点」での便利、不便利というだけではとらえきれないので。

池田さんの話の中でも、3級というものにチャレンジして、ひとつステップを上がったところで、非常に明確に2級、1級という目標が、将来の見通しとして開けたというお話がとても印象的でした。安定した家庭生活が送れるようになった大人でも、将来の見通しというものがあることがどのぐらい力になり、自分が努力をし続け、将来に対してとても意欲的になれるかということだと思います。自分が社会に何か貢献したいというようなポジティブな気持ちになるということは、将来の自分の見通しというものをキチンと持てているかどうかというところで、ものすごく違う。それは、大人でもそうである以上に、子どもにとって、自分の将来がどう見通せるかということを考えることは、本当に重要な意味があると思うわけです。その意味でも、今地域ということを考えてときに、一緒に暮らしている今のこのときの中で、どういうふうな課題の共有・調整というのができるかということ、この先、私たちはどういう社会をつくって、どういう人を育てていこうとしているのかという、時間の軸との両方の軸で考えていかなければいけない問題であるということ、今日の3人のお話の中からもう一度考えさせられたと思います。